中学校技術・家庭科教科書における衣生活教育内容の検討

An Analysis of Clothing Education on Technology and Home Economics Textbooks in Junior High School

杉　村　桃　子
Momoko Sugimura

1. 緒言

平成20年7月に改訂された中学校学習指導要領では，衣生活分野においては住生活分野と統合されたり，持続可能な消費生活や文化伝統などにも視野を広げた内容となっている．著者らは，中学校の技術・家庭（家庭分野）の教科書及び学習指導要領の記述内容の分析し，学習指導要領の改訂に伴い，「環境・リサイクル」「被服文化」に関する記述がみられるようになり，民族衣装や伝統的な織物などの被服文化へ興味・関心を持たせたり，持続可能な消費生活と結びつけた題材が必要であることおよび，教科書記述内容の分析から，「被服製作」が減少傾向にあるが，依然として衣生活教育の半分を占めていたことなどを報告した[1]．

本研究では，中学校の平成元年及び平成10年，平成20年告示の学習指導要領及び昭和61年から平成23年に検定された中学校の技術・家庭（家庭分野）の教科書で取り扱われている，衣生活分野における記述内容を分析し，今後の課題を検討する．

2. 研究方法

(1)学習指導要領の記述内容

表1に示す，中学校の平成元年及び平成10年，平成20年告示の学習指導要領の衣生活分野において，どのように記述されているのか分析する．

(2)教科書の記述内容

表2及び3に示す，昭和61年から平成23年に検定された中学校技術・家庭科の教科書18冊（東京書籍9冊，開隆堂9冊）の，衣生活分野の記述内容及び題材内容を分析する．調査項目は，領域別掲載量，衣生活領域の記述内容，被服製作題材である。

各領域別掲載量を調べるにあたって，各教科書の全体頁数を対象とし，口絵や写真，折り込み部分も含める。ただし，目次および索引は除外する。そして，全体を7領域（衣生活，食生活，住生活，家族・家庭生活，保育，消費者教育，環境）に分類し，各領域の掲載割合を調べる。ただし，衣生活領域内の環境に関する記述は，「環境」領域ではなく，「衣生活」領域に分類する。

教育内容別掲載量の分析は，過去の文献[2]を参考

表1　分析対象の中学校学習指導要領[2]

タイトル	告示年月	施行年度
中学校指導要領解説技術・家庭編	平成元年3月	平成5年度
中学校学習指導要領解説―技術・家庭編―	平成10年12月	平成14年度
中学校学習指導要領解説―技術・家庭編―	平成20年3月	平成24年度

2017.6.21　受理

表2　分析対象の教科書（東京書籍）

No.	文献名	検定年・月	発行年・月
A	新訂新しい技術・家庭上	昭和61年3月	平成2年2月
B	新訂新しい技術・家庭下	昭和61年3月	平成2年2月
C	新しい技術・家庭上	平成4年1月	平成5年2月
D	新しい技術・家庭下	平成4年1月	平成6年2月
E	新編　新しい技術・家庭上	平成8年1月	平成12年2月
F	新編　新しい技術・家庭下	平成8年1月	平成12年2月
G	新しい技術・家庭 家庭分野	平成13年2月	平成14年2月
H	新編新しい技術・家庭 家庭分野	平成17年1月	平成18年2月
I	新しい技術・家庭 家庭分野	平成23年2月	平成24年2月

表3　分析対象の教科書（開隆堂）

No.	文献名	検定年・月	発行年・月
J	技術・家庭　上	昭和61年3月	平成元年12月
K	技術・家庭　下	昭和61年3月	平成2年12月
L	技術・家庭　上	平成4年3月	平成7年12月
M	技術・家庭　下	平成4年4月	平成6年12月
N	技術・家庭　上	平成8年1月	平成12年12月
O	技術・家庭　下	平成8年2月	平成12年12月
P	技術・家庭　家庭分野	平成13年2月	平成16年2月
Q	技術・家庭　家庭分野	平成17年1月	平成19年2月
R	技術・家庭　家庭分野	平成23年2月	平成24年2月

表4　衣生活領域の教育内容の分類

分野	教育内容
被服材料	（布の成り立ち、繊維の種類とその性質など）
着装教育	（衣服のはたらき、自分らしい着方、既製服の選び方など）
被服管理	（取り扱い絵表示、衣服の手入れと補修など）
被服製作	（製作の計画、衣服構成、裁縫ミシンの使い方、採寸など）
環境・リサイクル	（衣服計画、資源・環境と衣服、衣服のリサイクル法など）
被服文化	（民族衣装、和服の構成、刺し子など）

に，各教科書の衣生活領域の教育内容を表4のように6分野に分類し，教科書別，年代別に本文と図表の面積を測り，衣生活領域全体に占める割合を求める。なお，巻頭資料・巻末資料などの部分も分析対象とし，写真・図・表などは「図表」に含める。脚注にある学習のめあてやポイントは，「本文」に含める。掲載面積は「cm^2」を単位とし，余白を除く全ての印刷部分の面積を測ることとする。

被服製作題材については，教科書別・年代別に製作物の内容及び掲載数を調べる。

3. 結果及び考察

3-1. 学習指導要領の記述内容

文部科学省の中学校学習指導要領3冊における，衣生活領域の記述内容に関する調査結果を表5に示した。

表5から，平成元年改訂版[3]，平成10年改訂版[4]，平成20年改訂版[5]ともに「被服材料」，「着装教育」，

表5　学習指導要領における衣生活領域の記述内容

内容	平成元年改訂版	平成10年改訂版	平成20年改訂版
被服材料	○	○	○
着装教育	○	○	○
被服管理	○	○	○
被服製作	○	○	○
環境・リサイクル	×	○	○
被服文化	×	○	○

○・・・記述あり　、　×・・・記述なし

「被服管理」,「被服製作」の内容がみられた。「環境・リサイクル」,「被服文化」については，平成元年改訂版ではみられなかったが，平成10年改訂版，平成20年改訂版ではみられるようになった。解説を詳しくみると，平成元年改訂版の「着装教育」に関する記述として，『中学生にふさわしい日常着の整え方について知らせ，着用の工夫ができるようにする。』(p.67)とあった。平成10年改訂版では，『社会生活をする上での衣服の機能について考え，目的に応じた着用や個性を生かす着用を工夫できるようにする。』(p.55)と記載されていた。また，平成10年度改訂版では，日常生活における実践につなげることができるように，コンピュータを活用して，衣服の組合せを工夫したり，流行について討論するなどの授業の提案もあった(p.56)。その他,「環境・リサイクル」に関する記述として,『衣服を購入するだけでなく，資源や環境に配慮する立場から，他の人から譲り受けたり，リフォームしたりすることにも触れるように』(p.57)とあった。

平成元年改訂版の「被服製作」に関しては,『日常生活における手芸の種類や特徴について考えさせ，ししゅう，編み物及び染色のうちから適切なものを選んで取り上げるように』(p.85)と記載されていた。

平成10年改訂版では，ししゅう，編み物及び染色などの手芸に関する記述がなくなっていたが,「被服文化」に関する記述として,『我が国の文化に関心をもたせるとともに，地域の産業とのかかわりなども考慮し，学校及び生徒の実態に応じて，和服等の平面構成の基礎が理解できるような題材を扱うこともできる。例えばはんてんやゆかたなどの簡単なものが考えられる。』(p.63)という記述があった。

平成20年改訂版では，衣生活と住生活を人間を取り巻く環境としての視点から取り上げることにし，新たに「C　衣生活・住生活と自立」という分野をつくり，衣生活分野と住生活分野を統合させていた。平成20年改訂版の内容を詳しくみると,「被服文化」に関して,『和服と洋服の構成や着方の違いに気付かせたり，衣文化に関心をもたせたりすることなど，和服の基本的な着装を扱うことも考えられる。』(p.70)という記述があった。また,「着装教育」に関しては,『①各自で必要な衣服の種類や数量を把握する，②よく着るものとあまり着ないものについて，それぞれの理由を話し合う，③日常着用する衣服を購入する時の視点を調べたり話し合う』(p.70-71)という授業の提案があった。このような授業は,手持ちの衣服を計画的に活用することができ,「D　身近な消費生活と環境」の学習との関連を図ることができると考えられた。「被服管理」に関しては,指導方法として『実験や調査を取り入れたり，視聴覚教材を活用したりするなどして，衣服の手入れについての関心を高め，生活における実践につなげることができるように配慮する』(p.71-72)と記載されていた。この学習では「D　身近な消費生活と環境」との関連を図り，身近な環境に配慮した水や洗剤の適切な使い方を考えさせるなど，循環型社会への理解を深め,「環境・リサイクル」に目を向けられるようにすることも考えられた。また,「被服製作」に関する記述として,『実習で扱う題材については，完成後に活用することにより自分や家族の生活がより豊かになるような物を設定する』(p.75)とあった。着用されなくなった衣服をリフォームしたり，自分や家族の衣服を補修したりすることが考えられた。また，被服製作題材においても住生活分野と関連した物を製作するよう,『安全に生活する視点から，事故を防ぐ手立てとなるものを製作することなども考えられる。』(p.76)と記載されていた。

3-2. 教科書の記述内容

(1)領域別掲載量

中学校技術・家庭科教科書における各領域の割合の年代別推移を図1及び2に示した.

図1から，東京書籍では，昭和61年度版～平成23年度版までの教科書をみると，「衣生活」はA・BからIまで42.1%から20.3%に減少した。「食生活」はA・B(37.1％)からC・D(26.0％)まで減少したが，その後，E・Fでは28.4%，Gでは29.6%，Hでは32.9%に増加し，Iでは31.8%に減少した。「住生活」はA・B(8.1％)からE・F(15.2％)まで約1.88倍になったが，Gでは8.3%に減少し，それ以降横這い状態である。「家族・家庭生活」はA・BからIまで増減を繰り返し, 0.5%から11.7%に増加した。「保育」はA・BからIまで増減を繰り返し，10.4%から14.6%に増加した。「消費者教育」は, A・Bでは0.9%しかなかったが，C・Dで4.3%，E・Fで5.7%に増加した。その後，Gで5.2%に減少したが，Iで8.7%に増加した。「環境」はA・BからIまで増減を繰り返し，0.9%から4.5%に増加した。全体的には「衣生活」は減少傾向にあり，「家族・家庭生活」,「消費者教育」,「環境」は増加傾向にあることがわかった。

図2から，開隆堂では，昭和61年度版～平成23年度版までの教科書をみると，「衣生活」はJ・KからRまで40.8％から19.1％に減少した。「食生活」はJ・K(38.9％)からN・O(27.6％)まで減少したが，その後，Pでは30.0％に増加し，Qでは26.2％に減少した。「住生活」はJ・K(9.0％)からN・O(13.8％)まで増加したが，その後，Pでは9.4%，Rでは7.1%に減少した。「家族・家庭生活」はJ・KからQまで0.5%から21.5%に増加したが，Rでは10.1%に減少した。「保育」はJ・K(9.5％)からN・O(13.3％)まで増加したが，その後，Pでは5.9%に減少し，Rでは16.3%に増加した。「消費者教育」は，J・KからRまで0.9%から7.3%に増加した。「環境」はJ・K(0.5％)からP(7.4％)に増加したが，Qでは4.6%に減少し，Rでは6.2%に増加した。全体的には，「衣生活」,「住生活」は減少傾向にあり，「保育」,「消費者教育」,「環境」は増加傾向にあることがわかった。

以上のことから，東京書籍及び開隆堂の教科書における領域別掲載量は,「衣生活」は減少傾向を,「消費者教育」,「環境」は増加傾向を示していることがわかった。

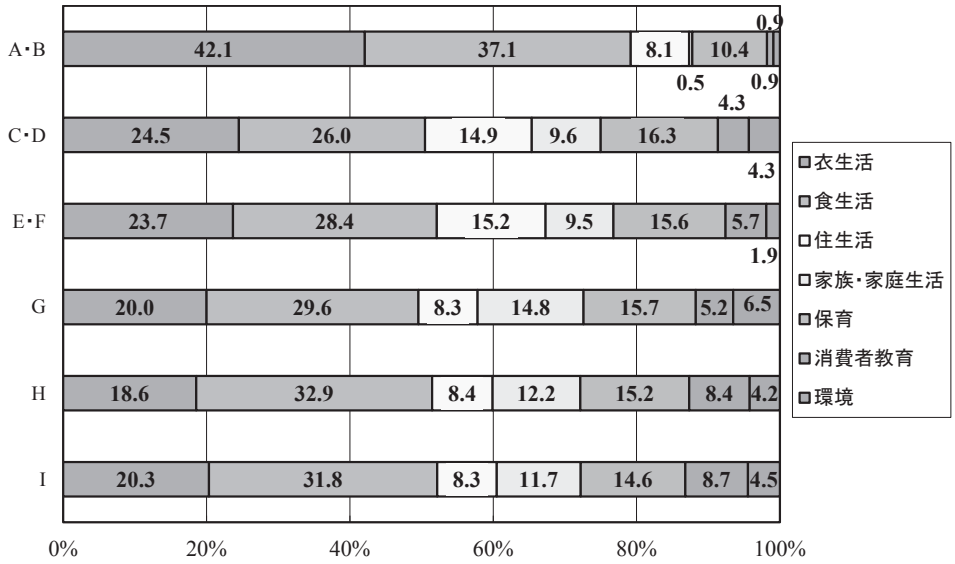

図1. 教科書の領域別掲載量（東京書籍）

(2)衣生活教育の内容別掲載量

「被服文化」,「環境・リサイクル」,「被服製作」,「被服管理」,「着装教育」,「被服材料」の教育内容が,それぞれの教科書の衣生活領域において占める割合を図3及び4に示した。

図3から，東京書籍では，昭和61年度版～平成23年度版までの教科書をみると,「被服材料」はA・B(6.4％)からC・D(9.5％)まで増加傾向にあったが,その後減少し，G以降では3％未満であった。「着装教育」はC・DとE・Fの間で15.5％から7.3％へと約47.1％減少したが，Gでは19.0％と約2.6倍に，Hでは20.7％に増加し，Iでは15.2％に減少した。「被服管理」はA・Bでは1.5％しか掲載されていなかったが，C・D とE・Fの間で11.0％から34.7％へと

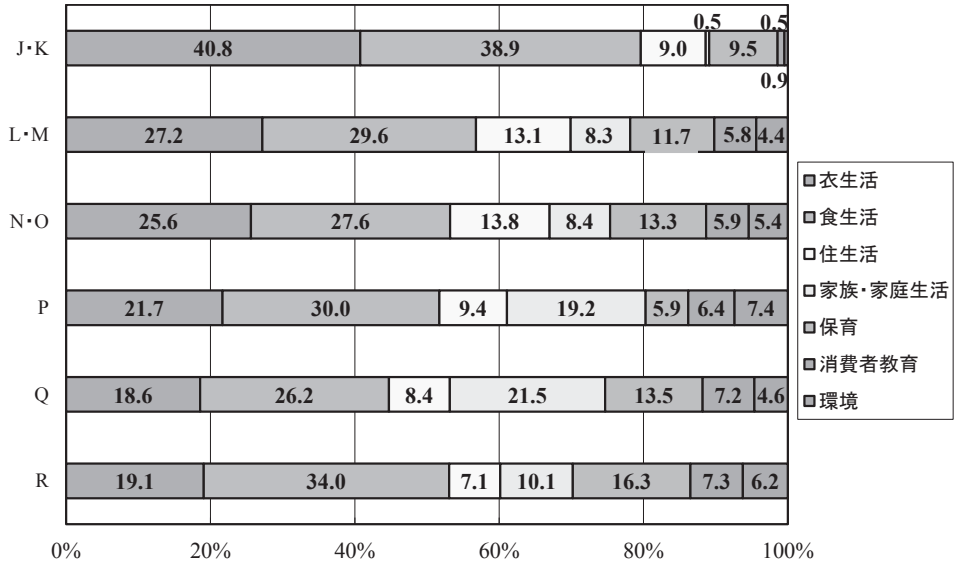

図2. 教科書の領域別掲載量（開隆堂）

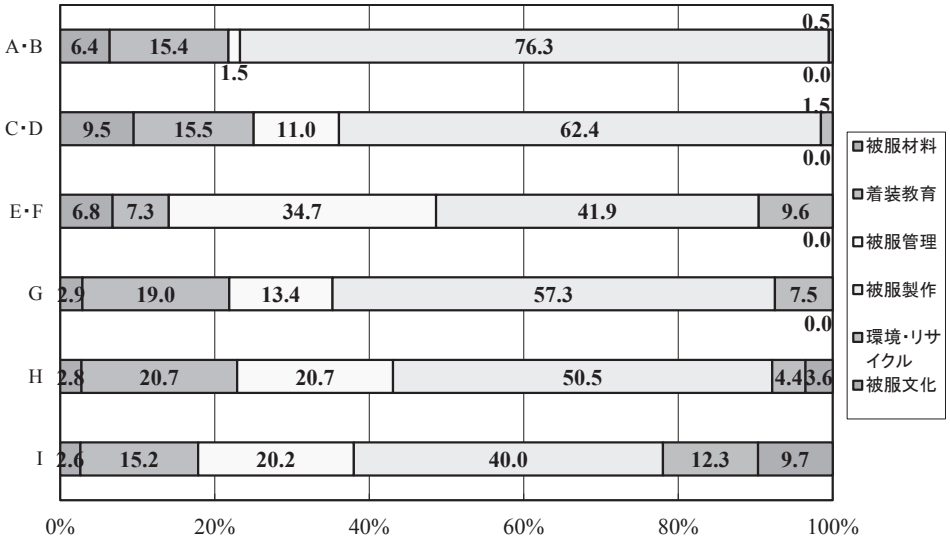

図3. 衣生活領域における内容記述量（東京書籍）

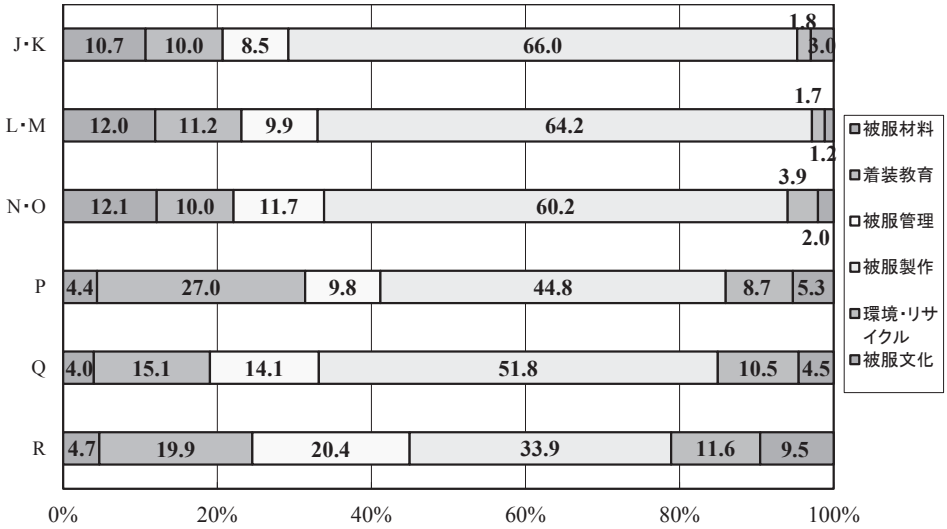

図4．衣生活領域における内容記述量（開隆堂）

約3.2倍に増加した。その後，Gでは13.4％と減少し，Hでは20.7％と増加し，「着装教育」と同じ割合になった。一方，「被服製作」は，A・BからE・Fまで76.3％から41.9％へと減少し，その後，Gでは57.3％，Hでは50.5％，Iでは40.0％に減少した。また，衣生活領域中の「環境・リサイクル」に関する記述はA・B，C・Dではほとんど見られなかったが，E・Fでは9.6％となり，Gでは7.5％，Hでは4.4％と減少していたが，Iでは12.3％に増加した。「被服文化」に関する記述は，H初めてみられ，3.6％であり，Iでは9.7％になり約2.69倍に増加した。全体的には，「被服材料」，「被服製作」が減少し，「被服管理」，「環境・リサイクル」，「被服文化」が増加傾向にあった。平成20年告示の学習指導要領以降の検定版では，「着装教育」「被服製作」が減少し，「環境・リサイクル」「被服文化」が増加していることがわかった．「被服製作」は減少傾向にあるものの，依然として，衣生活領域の約4割を占めていて，次いで「被服管理」及び「着装教育」の割合が多かった。

図4から，開隆堂では，昭和61年度版～平成23年度版までの教科書をみると，「被服材料」はJ・K(10.7％)からN・O(12.1％)まで増加傾向にあり，その後，Rでは4.4％，Qでは4.0％，Rでは4.7％と減少傾向を示した。「着装教育」はJ・Kでは10.0％，L・Mでは11.2％，N・Oでは10.0％と，J・KからN・Oまで約10％前後で増減を繰り返して推移したが，Pでは27.0％と約2.7倍になり，衣生活領域の約4分の1を占めたが，Qでは15.1％に減少し，Rでは19.9％に増加した。「被服管理」はJ・K(8.5％)からN・O(11.7％)まで増加し，Pでは9.8％に減少したが，Qでは14.1％に，Rでは20.4％に増加した。一方，「被服製作」はJ・K(66.6％)からP(44.8％)まで減少傾向を示したが，Qでは51.8％と増加し，Rでは33.9％に減少した。「環境・リサイクル」はL・M(1.7％)からR(11.6％)まで増加し，衣生活領域で1割を占めるようになった。「被服文化」の割合もN・Oまでは3％以下だったが，Pでは5.3％，Qでは4.5％，Rでは9.5％を占めるようになった。全体的には，東京書籍と同様に，「被服製作」，「被服材料」が減少し，「着装教育」，「被服管理」，「環境・リサイクル」，「被服文化」が増加傾向にあった。平成20年告示の学習指導要領以降の検定版では，「被服製作」がかなり減少し，「被服文化」がかなり増加していることがわかった．「被服製作」は減少傾向にあるものの，依然として，衣生活領域の約3割強を占めており，次いで「被服管理」及び「着装教育」の割合が多かった。

以上のことから，東京書籍及び開隆堂の教科書における衣生活教育の内容別掲載量は，「被服材料」，「被服製作」が減少し，「被服管理」，「環境・リサイクル」，「被服文化」が増加傾向にあった．平成10年告示の学習指導要領以降の検定版では，「被服製作」は減少傾向であったが，依然として衣生活分野の約半分以上を占めていたのが，平成20年告示の

学習指導要領以降の検定版では，東京書籍及び開隆堂の教科書ともに半分以下になった．すなわち,「被服製作」は減少傾向にあるものの，衣生活領域の約3～4割を占めており, 次いで「被服管理」及び「着装教育」の割合が多いことがわかった。

(3)被服製作題材

各教科書における被服製作題材の教科書別掲載数を，集計した結果を表6及び7に示した。

表6より，東京書籍の教科書では，昭和61年度～平成23年度までの合計をみると,「マフラー（棒針編み)」が5件と最も多く, 次いで「ショートパンツ」が4件,「ししゅう」,「はんてん」,「ハーフパンツ」が3件であった。A・Bでは「編み物」作品が10件,「染色」作品が8件,「スカート」が4件,「スモック」が3件あり,「編み物」,「染色」などの手芸作品が多く掲載されていた。「環境・リサイクル」とも関連のある「リフォーム」作品は，A・Bで2件，E・Fで2件，Iで1件であり，製作作品には「アームカバー」,「エプロン」,「ハーフパンツ」,「ショルダーバッグ」,「お手軽ベスト」があった。C·Dでは「編み物」作品が2件,「染色」作品が3件に減少し，新たに「キュロットスカート」や「ショートパンツ」や,「タンクトップ」などが掲載されていた。「ショートパンツ」は，E・FからHまで，継続して製作題材として取り上げられていた。また，E・FからHまでは日本の伝統的な衣服の「はんてん」が継続して取り上げられていた。

表7より，開隆堂の教科書では，昭和61年度～平成23年度までの合計をみると,「Tシャツ」と「ベスト」が4件と最も多く，次いで「ハーフパンツ」,「ちゃんちゃんこ」,「ししゅう」,「マフラー（棒針編み)」が3件,「ノースリーブパーカ（貫頭衣型)」,「ショートパンツ」,「ウォールポケット」,「ペットボトルホルダー」,「防災頭巾」,「クッションカバー(かぎ針編み)」，がそれぞれ2件であった。J・Kでは合計20件のうち,「スカート」が5件,「染色」作品が3件,「編み物」作品が2件掲載されており，東京書籍の同年代の教科書A・Bと同様,「スカート」や「編み物」,「染色」などの手芸作品が多く掲載されていた。「ししゅう」と「マフラー（棒針編み)」はJ・KからN・Oまで継続して被服製作題材として掲載されていたが，その後，製作題材として取り上げられなくなった。L・Mでは初めて「Tシャツ」が掲載され，その後も継続して掲載されていた。Pでは9作品のうち，5作品が「環境・リサイクル」と関連のある「リフォーム」作品であり，製作作品には「アームカバー」,「エプロン」,「ショルダーバッグ」,「ティッシュカバー」,「眼鏡ケース」があった。全体的にみると，東京書籍・開隆堂ともに被服製作題材作品例の掲載数は減少傾向にあった。掲載数は昭和61年度版教科書のA・Bが29件，J・Kが20件であったが，平成17年度版教科書ではHが7件，Qが6件にまで減少し，東京書籍では約4分の1に，開隆堂では約3分の1に減少したが，平成23年度版教科書ではIが8件と若干増加し，Qが21件と3.5倍に増加した。開隆堂では「編み物」作品は「クッションカバー（かぎ針編み)」,「帽子(かぎ針編み)」,「ベスト(前開型)(棒針編み)」などの6種類であったが，東京書籍では，その2倍以上の16種類あり，開隆堂には掲載されていなかった「レース編み」作品が3件あった。また,「リフォーム」作品は，東京書籍が「アームカバー」,「エプロン」,「お手軽ベスト」,「ショルダーバッグ」,「ハーフパンツ」の5種類であったのに対し，開隆堂では「アームカバー」,「エプロン」,「ショルダーバッグ」に加え,「あずま袋」,「アームカバー」,「エコバッグ」,「ティッシュカバー」,「箸入れ袋」,「枕カバー」,「眼鏡ケース」,「リュックサック」の10種類であった。循環型社会への理解を深め,「環境・リサイクル」に目を向けられるような作品例が増加している傾向が見られた。日本の伝統的な衣服の製作に関しては，東京書籍では「はんてん」，開隆堂では「ちゃんちゃんこ」が取り上げられていた。また，防災グッズとして，平成23年度版教科書において東京書籍では「防災リュック」，開隆堂では「簡易スリッパ」や「ナップザック」,「鍋つかみ」,「防災頭巾」が掲載されていた。

以上のことから，被服製作題材作品例の掲載数については, 東京書籍·開隆堂ともに「リフォーム」「リメイク」作品例や防災グッズなどにより増加した。平成20年告示の学習指導要領以降の検定版では「椅子カバー」が作品例として掲載され，住生活分野との統合の影響がみられた。「エコバッグ」や「ペットボトルホルダー」なども作品例としてあり，学習者が持続可能な消費生活について学ぶことができる製作物の提案が求められると考えられる。

4. まとめ

本研究では，中学校の平成元年及び平成10年，平成20年告示の学習指導要領及び昭和61年から平成17年に検定された中学校の技術・家庭(家庭分野)

表6　被服製作題材作品例の掲載数（東京書籍）

作品名	教科書						合計
	A・B	C・D	E・F	G	H	I	
スモック(前開型)	1						1
スモック(後開型)	1						1
スモック(貫頭衣型)	1						1
インバーテッドスカート	1						1
ギャザースカート	1						1
フレアースカート	1						1
フレアーギャザースカート	1						1
キュロットスカート		1					1
ショートパンツ		1	1	1	1		4
ハーフパンツ			1			2	3
ロングパンツ			1				1
タンクトップ		1	1				2
ベスト			1				1
半袖シャツ			1				1
ノースリーブパーカ(貫頭衣型)				1			1
長袖パーカ(前開型)		1	1				2
ラウンジウェア			1	1			2
プルオーバーシャツ					1		1
はんてん			1	1	1		3
長袖パジャマ	1		1				2
ししゅう	1	1	1				3
トートバッグ						2	2
マイチェアカバー						1	1
ファイルカバー						1	1
弁当包み					1		1
防災リュック						1	1
【編物】							
・かぎ針							
編みぐるみ			1				1
花びんしき			1				1
クッションカバー	1						1
小物しき	1						1
手袋	1						1
針さし	1						1
バッグ	1						1
ひざかけ		1					1
ペンスタンド	1						1
・棒針							
手袋			1				1
ベスト(前開型)	1						1
帽子			1				1
マフラー	1	1	2		1		5
・レース編							
花びんしき			1				1
ナプキン	1						1
ハンカチ	1						1
【染色】							
・しぼり染め							
ギャザースカート	1						1
Tシャツ	1				1		2
のれん			1				1
弁当包み	1	1					2
・ろうけつ染め							
クッションカバー	1		1				2
テーブルクロス	1						1
ふくろ	1						1
ブックカバー	1	1					2
ペンケース	1	1					2
・草木染							
Tシャツ(紅茶)			1				1
・ステンシル							
Tシャツ			1		1		2
【リフォーム】							
アームカバー	1						1
エプロン	1						1
お手軽ベスト						1	1
ショルダーバッグ			1				1
ハーフパンツ			1				1
合計	29	10	24	4	7	8	82

表7　被服製作題材作品例の掲載数（開隆堂）

作品名	教科書						合計
	J・K	L・M	N・O	P	Q	R	
ギャザースカート	1						1
セミタイトスカート	1						1
プリーツスカート	1						1
フレアースカート	1						1
フレアーギャザースカート	1						1
キュロットスカート	1						1
ショートパンツ		1	1				2
ハーフパンツ				1	1	1	3
ロングパンツ		1					1
ベスト	1		1			2	4
ノースリーブ作業着(前開型)	1						1
Tシャツ		1	1	1	1		4
半袖シャツ		1					1
ノースリーブパーカ(貫頭衣型)			1	1			2
長袖パーカ(前開型)		1					1
ちゃんちゃんこ				1	1	1	3
ラグラン袖パジャマ	1						1
長袖パジャマ	1						1
アームカバー	1						1
ウォールポケット	1					1	2
簡易スリッパ						1	
三角巾(ひも付)	1						1
しぼり袋	1						1
ショルダーバッグ						1	1
ナップザック						1	1
鍋つかみ						1	1
パッチワークタペストリー						1	1
ファイルカバー						1	1
ブックカバー						1	1
ペットボトルホルダー						2	2
防災頭巾						2	2
マスク						1	1
ししゅう	1	1	1				3
【編物】							
・かぎ針							
クッションカバー	1		1				2
手袋		1					1
帽子			1				1
モチーフ			1				1
・棒針							
室内ばき		1					1
マフラー	1	1	1				3
【染色】							
・しぼり染め							
クッションカバー		1					1
小風呂敷	1						1
Tシャツ			1				1
・ろうけつ染め							
かべかけ		1					1
クッションカバー	1						1
テーブルクロス	1						1
ブックカバー			1				1
・型染め							
エプロン			1				1
Tシャツ		1					1
・草木染							
ハンカチ					1		1
・ステンシル							
アームカバー			1				1
【リフォーム】							
あずま袋						1	1
アームカバー				1			1
エコバッグ						2	2
エプロン				1			1
ショルダーバッグ				1			1
ティシュカバー				1			1
箸入れ袋						1	1
枕カバー					1		1
眼鏡ケース				1			1
リュックサック					1		1
合計	20	12	13	9	6	21	80

の教科書で取り扱われている，衣生活領域における記述内容を分析した結果，以下のことがわかった。

学習指導要領の改訂に伴い，東京書籍および開隆堂の教科書ともに，「衣生活」「環境」の掲載量が増加し，「家族・家庭生活」の掲載量は減少した。

衣生活教育内容の推移をみると，東京書籍および開隆堂ともに，「被服管理」，「環境･リサイクル」「被服文化」が増加し，「被服製作」がかなり減少した。教科書記述内容の分析から，「被服製作」が減少傾向にあるが，依然として衣生活教育の半分を占めていたのが，平成20年告示の学習指導要領以降には，東京書籍及び開隆堂の教科書ともに半分以下になった。

被服製作題材作品例の掲載数が，東京書籍・開隆堂ともに「リフォーム」「リメイク」作品や防災グッズなどにより増加した。平成20年告示の学習指導要領以降の検定版では，住生活領域との統合の影響がみられた。「エコバッグ」や「ペットボトルホルダー」なども作品例としてあり，学習者が持続可能な消費生活について学ぶことができる製作物の提案が求められると考えられる。

参考・引用文献

1)杉村・綿引：日本家庭科教育学会第52回大会要旨集，P.122-123(2009)
2)田結庄順子編著：「戦後家庭科教育実践研究」，梓出版社，p.112-113(1996)
3)文部省：「中学校指導書　技術・家庭編」（平成元年7月）
4)文部省：「中学校学習指導要領　解説―技術・家庭編―」（平成10年12月）
5)文部省：「中学校学習指導要領　解説　技術・家庭編」（平成20年7月）